

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2017

課題番号：26301032

研究課題名(和文)日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか～アジアとの比較と要因研究

研究課題名(英文)Comparison of self-esteem of children in Asian countries and factors affecting its development

研究代表者

榊原 洋一 (SAKAKIHARA, YOICHI)

お茶の水女子大学・ 名誉教授

研究者番号：10143463

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本の子どもの自尊感情は世界でも最も低いという先行研究結果は、日本の子育てや幼児教育に大きなインパクトを与えており、幼児教育の現場では子どもの自尊感情を高めるための方策が真剣に検討されている。しかし、先行研究は主に欧米の子どもの比較研であり、自尊感情に係る文化的差異の影響を受けている可能性がある。本研究は、Harterが開発した幼児期の子どもが直接回答する質問紙を使用して、日本とアジア3カ国の5歳児並びに7歳児の自尊環境を養育環境とともに調査し、アジアにおける国際比較と自尊感情を規定する要因を探索した。結果として、アジア圏で比較すると、日本の子どもの自尊感情は最低値ではないことが判明した。

研究成果の概要(英文)：Self-esteem of Japanese children have been reported to be lowest in the world, and educators who are concerned about these previous report have been working hard to promote the development of self-esteem among Japanese children. The reported low self-esteem was derived from comparative surveys between Japanese and European children, and therefore possibly biased with the cultural values. In order to examine the real state of self-esteem of Japanese children, we have compared the self-esteem of Asian children (Thailand, Vietnam, and Bangladesh) by a self-reported scale for self-esteem in children developed by S. Harter. We also surveyed the environmental factors that may influence children's self-esteem. It was found that self-esteem of Japanese 5-year and 7-year old children was not the lowest among the subject countries.

研究分野：小児科学

キーワード：自尊感情 幼児 アジア Harter尺度

1. 研究開始当初の背景

自尊感情あるいは自尊心は、自分の存在が社会の中で意義があると感じる心理的状态を表す言葉で、英語では self-esteem ないし self-worth という言葉が対応すると思われる。自尊感情は、経験や時間によって変動しにくい概して安定的な心理的構成概念である。自尊感情と似た構成概念として、自己有能感あるいは自己肯定感があるが、環境や経験によって変動する心理状態のこととされており、英語では self-competence ないし self-confidence, self-efficacy が相当する。ただし、自尊感情と自己有能感は、しばしばほぼ同義に使用されることがある。さらに、より一般的な心理的構成概念である自己評価(認知)(self-evaluation)あるいは自己概念(self-concept)は、自分の能力や状態(外見、体型など)の認識の状態であるが、これも時に自尊感情に関連した用語として使用されることがある。

自尊感情は、個人の内的な心理的状态であり、成人では Rosenberg(1965)の自尊感情尺度に代表される自記式の質問紙で測定されるが、子どもでは自分の心理状態を言語的に表現することが困難である。Harter は、8歳以上の子どもは学業成績や運動、仲間関係、外見などの特異的な領域において、自分の能力(状態)を判断することができ、その判断に基づいて自分自身の自尊感情(general worth of a person)を判断できるとした。Harter の考案した評定尺度による、子どもの自己認知と自尊感情に関する研究は、1980年代より多数行われ、子どもの自尊感情に関する様々な知見が集積されている。

しかし上記の Harter の評定尺度は、言語による自己の心理状態の叙述が困難な幼児期では使用できない。自尊感情は自己概念の発達と関連しており、3歳前後で自己概念が発達する時期の自尊感情の初期状態を知ることが困難であった。一般に5歳以下の子どもに、質問紙等などの言語を媒介とする評定尺度を使用することは難しいとする研究もある。

一方、年少の子どもの心理状態を評定するために、親や教師が子どもの行動を観察して、その心理状態を推定する尺度が開発されており、広く使用されている。子どもの精神的健康を評定する Strength and Difficulty Questionnaire や、QOL を評定する Kiddy-KINDL などはその例である。しかし、年長児での親評定と子ども自身による評定による自尊感情の測定結果には、相関が認められないという先行研究結果もあり、年少の子どもの自尊感情評定には技術的困難さが付きまわっている。

2. 研究の目的

本研究では、子どもの自尊感情が世界の中でも低いという一般的認識の根拠にもなっている古荘の知見が、就学前児やヨーロッパ

以外の国との比較でも成立するかどうかを検証することを目的として、以下の課題について検討する。

第一に、ヨーロッパではなく、アジアの2カ国の子どもの自尊感情を評定し、日本と比較する。第二に、フォーマルな教育の始まる前(就学前)の子どもの自尊感情を評定する。

さらに、自尊感情を規定する要因を各国で検討し比較する。

3. 研究の方法

対象は、日本、ベトナム、タイの複数の地域(都市)に住む、5, 6歳児である。本調査は対象国の代表値を求める疫学研究ではないが、子どもの自己認知の地域差を検出できるように、日本とタイでは、都市部と非都市部に居住する5歳児を対象とした。日本では秋田県(非都市部)、東京都(都市部)、埼玉県(都市部)、神奈川県(都市部)、北海道(都市部)から、それぞれ103名、62名、20名、24名、28名の計237名、タイからは Bangkok(都市部)、Nakorn Pathom(都市部)、Rachaburi(非都市部)、Nakorn Rachasima(非都市部)の4地域からそれぞれ、35名、34名、35名、26名の計130名、ベトナムからは Ho Chi Minh(都市部)から177名の幼稚園(保育所)の年長児(5歳、6歳)が対象となった。なお、バングラデシュからは、データが未回収であるために、分析には加えなかった。

pictorial scale は Harter と Pike によって開発された、子どもの自己認知を子ども自身の回答から評定するスケールである、子どもの行動が描かれた2種類の線画を対象児に提示し、対象児に自分はどちらに近いか選択してもらったのちに、線画の下にある円の大きさで、さらにその程度を選択してもらうことで、そこに描かれた子どもの特性を4段階で評定することが可能である。Harter は、年少の子どもの自己認知能力について因子分析をして検討した結果、認知・言語能力評価(cognitive competence)、身体能力評価(physical competence)、仲間からの受容感(peer acceptance)、母親からの受容感(maternal acceptance)の下位項目に分けることができるとしている。また認知能力と身体能力を合わせて「自己有能感」(competence)領域、友人関係と母親との関係を合わせて「社会的受容感」(acceptance)領域と2領域に区分できるとした。本研究では眞榮城らによって翻訳された日本語版と、作者の Harter 氏の許可を得てベトナム語、タイ語に翻訳、反訳したベトナム語版、タイ語版の pictorial scale を使用した。親への質問紙調査(別途報告予定)を同時に行ったが、質問紙のフェースシートで、対象児の属性(生年月日、性別)に関する情報を得た。pictorial scale による対象児への面接は、評定方法について講習を受けた調査対象国の言語を母国語とする女性調査員(10

名)が、児の所属する園(保育所、幼稚園)を訪問して行った。調査員は他児のいない部屋で対象児と面接し、サンプルの質問を提示し指差しによる回答方法を教示した後、質問文を読み上げながら24枚の本質問を順次行った。取得されたデータは統計解析ソフトに入力し、記述統計ならびに調査変数間の関連について解析を行った。

4. 研究成果

日本、ベトナム、タイからそれぞれ、237名、177名、130名の5、6歳児が調査に参加した。調査員によって記入されたスコアをSPSSに入力し、以下の分析に用いた。なお、データが全てそろっていない対象者は分析から除外したため、それぞれ233名、176名、98名が分析の対象となった。

日本、ベトナム、タイの5、6歳児の、pictorial scaleの4項目の合計スコア(一項目フルスケール24点、4項目フルスケール96点、高得点ほど能力ないし受容性が高い)平均値はそれぞれ76.0($SD=9.9$)、83.6($SD=10.9$)、62.6($SD=4.2$)であった(カッコ内は標準偏差)。各国の合計スコアの平均値を比較するため一元配置分散分析を行った結果、各国間での有意差が認められた($F(2, 505) = 155.19, p = .000$)。

次に、4つの下位項目ごとの平均値の国別比較を一元配置分散分析により行った。仲間からの受容感以外の項目について、3カ国間で平均値に有意差(ベトナム>日本>タイ)($p < .01$)が認められた。仲間からの受容感については、日本とベトナム間には有意差が認められなかったが、タイと、日本、ベトナムの間には有意差が認められた。

さらに、自己有能感、社会的受容感について、それぞれの平均値を国別に比較した。2領域ともに、3カ国間でスコアの平均値に有意($p < .01$)な差が認められた(ベトナム>日本>タイ)。

性差を見るために各国における pictorial scale 合計得点、4つの下位項目および2領域の平均値の男女差を比較した(独立したサンプルのt検定)ところ、日本において身体能力評価と自己有能感の平均点に有意の男女差(女>男、 $p < .05$)が認められた。またタイでは、母親からの受容感で男女差(女>男、 $p < .05$)が認められた。

この結果から、日本の子どもの自尊感情は、5歳児、7歳児では、世界で最も低いという先行研究の結果は支持されなかった。

上記自尊感情の国比較の結果をうけ、現在各国の子どもの生育環境の差と、それらが子どもの自尊感情に与える影響について分析を続けている。

なお、データ回収が最も早期に完了した日本において、子どもの自尊感情と、自尊感情を構成要素として含むQOLを規定する要因

について以下のような一次解析結果が得られている。

日本の5つの地域(東京近郊、埼玉、横浜、秋田、北海道)に住む237人の5歳児(第一波調査)のうち、2年後の7歳時に再調査できた93名を対象に、自尊感情ならびにQOL尺度(KINDL)を従属変数とし、注意欠陥多動の尺度(DuPaul)、親のQOL(WHO)と自尊感情(Rosenberg)、子どもの性、身長、体重、睡眠時間、TV視聴時間、親の学歴、世帯年収、同居家族数、7歳時の子どもの成績を独立変数として、子どもの自尊感情とQOLを規定する要因について、重回帰分析を行い、以下のような結果を得ている。

5歳児では子どものQOLの決定因子として親のQOL($\beta = .31$)、子どもの注意得点($\beta = -.524, R^2 = .346$)、7歳児では子どものQOLの決定因子として5歳児と同様に親のQOL($\beta = .282$)と注意得点($\beta = -.405, R^2 = .417$)、自尊感情では、5歳児では決定因子として子どもの注意得点($\beta = -.510, R^2 = .173$)、7歳児では、決定因子として睡眠時間($\beta = .159$)、注意得点($\beta = -.404$)、成績($\beta = .202, R^2 = .267$)であった。

日本以外の2カ国に着いても、上記関連や、その他のQOLならびに自尊感情に関連する因子とその年齢変異を検討し、発表してゆく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

榎原洋一、村松志野、松本聡子、瀬尾知子、眞榮城和美、Tran Diep Tran, Kaewta Nopmaneejumruslers, 菅原ますみ、アジアにおける子どもの自尊感情の国際比較、チャイルド・サイエンス、14:39-43,2017

〔学会発表〕(計9件)

菅原ますみ、松本聡子、眞榮城和美、瀬尾知子、村松志野、榎原洋一、日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか4~幼児の自己有能感および自尊感情の規定要因~、第12回日本子ども学会、2015、神戸

松本聡子、眞榮城和美、村松志野、瀬尾知子、菅原ますみ、榎原洋一、日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか3~Harter幼児版:親子の得点比較~、2015、第12回日本子ども学会、神戸

眞榮城和美、松本聡子、村松志野、瀬尾知子、菅原ますみ、榎原洋一、日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか2~Harter幼児版:ツールの構造検討~、2015、第12回日本子ども学会、神戸

村松志野、松本聡子、瀬尾知子、眞榮城和美、菅原ますみ、榎原洋一、日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか1~Harter幼児版:自己認

知のアジア比較~, 2015、第12回日本子ども学会、神戸

榊原洋一、村松志野、松本聡子、瀬尾知子、眞榮城和美、菅原ますみ、子どもの不注意・多動行動はQOLを低下させる, 2016, 第13回日本子ども学会、浜松

榊原洋一、村松志野、松本聡子、瀬尾知子、眞榮城和美、菅原ますみ、幼保小接続期における幼児の自尊感情の変化, 2016, 第13回日本子ども学会、浜松

瀬尾知子、村松志野、松本聡子、眞榮城和美、菅原ますみ、榊原洋一、子どもの食行動と性差・母親の食生活QOLとの関連2017、第28回日本発達心理学会、広島

榊原洋一、村松志野、松本聡子、瀬尾知子、眞榮城和美、菅原ますみ、子どものQOLと自尊感情を規定する要因の検討, 2017, 第14回日本子ども学会、岡山

Yoichi Sakakihara, Inattention is a major factor in determining children's QOL and self-esteem, Asian and Oceanian Congress of Child Neurology, 2017, Fukuoka

〔図書〕(計0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

榊原洋一(SAKAKIHARA, Yoichi)
お茶の水女子大学・名誉教授

研究者番号：10143463

(2)研究分担者

菅原ますみ(SUGAWARA, Masumi)

お茶の水女子大学基幹研究院・教授

研究者番号：20211302

瀬尾知子(SENOO, Tomoko)

秋田大学教育文化学部・准教授

研究者番号:00726309